孫暁剛著

『遊牧と定住の人類学――ケニア・レンディーレ社会の持続と変容――』

昭和堂　2012年　v+196+viiiページ

波佐間（はざま）　逸博（いつひろ）

Ⅰ

本書は，著者が2005年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文にもとづいている。本書の目的は，現在，北ケニアの乾燥地でいとなまれている遊牧活動に関する著者自身の緻密な生態人類学的調査と，同地で1970年代以降に実施されてきた先行研究とを比較対照するアプローチをつかって，どのように生業戦略が改変されながら維持されているのかを，外部社会との関係のなかで検討し，生業としての遊牧の持続性を考察することにある。

アフリカ遊牧社会の人類学において，乾燥地帯に生きる遊牧民が，干ばつに起因する飢饉という「宿命的な痼疾」［伊谷 1982, 12］を内包する環境条件を，どのような適応戦略によって克服しているのかを探究する試みは，一本の太い研究潮流をなしてきた。本書の舞台となっているレンディーレ・ランドで実施された1970年代後半からの生態人類学的な現地調査もまた，気候変化や牧畜家畜の生理生態といった自然の制約に対するレンディーレの社会生態的な適応戦略を解明するものであった［Sato 1980］。本書は，このような人間と自然の相互関係をめぐる研究蓄積のうえにたって，さらに近年になって「地域社会・国家・グローバル社会」との接触をつうじて人びとが開始した意欲的な実践を，生業の持続性との関連から考察しようとするものである。

東アフリカ遊牧社会の社会変動というテーマは，1980年代から積極的に設定されるようになった。多くの研究の骨子は，社会・経済的な階層化や都会への人口流出，健康・栄養状態の悪化といったネガティブな事象の発現機構を分析するもので，しばしば，改善された社会開発への提言をともなっていた。他方，自然科学的なアプローチをもって，自然環境への適応戦略という観点から遊牧にわけいる研究においてもまた，遊牧民の生業経営により生態環境が劣化し，生産が低下するという考え方の強い影響をうけて，その持続に懐疑をなげかける議論がさかんに提出された。しかし，本書の全体をつらぬくのは，自然・社会科学的なアフロ・ペシミズムを超出して，新奇な生活状況にたくみに順応する力を備えた「生き方としての遊牧」を見通しうる新しい地平をきりひらこうとする意思である。

レンディーレ・ランドでも，ほかの東アフリカ遊牧社会と同様に，定住化政策や開発計画の導入により定住や進学，出稼ぎがひろまったと書いたあとで，著者は以下のように述べる。「しかしながら人びとの大半は，遊牧こそが干ばつなどの自然災害に耐えて，この不毛な地に自立して生きる唯一の手段と信じ，家畜とともに暮らしている。（中略）1980年代以降には，このような社会変化に注目した研究が数多く見られるようになった。しかし一方では人びとの生活の根幹である遊牧活動にはあまり関心が払われなくなり，遊牧民の将来について明るい見通しを示唆するものは少ない」（ivページ）。このような，「はじめに」での問題意識の提示につづいて記述されていくのは，今日の遊牧生業に視座を据えることによってうかびあがってくる，貨幣経済との接触や町の出現，定住化といった社会的な変化に対する遊牧民の柔軟な身構えである。

Ⅱ

本書の構成は以下のようになっている。

第１章　現代に生きる東アフリカ牧畜民
第２章　レンディーレをとりまく環境の変化
第３章　遊牧を継続させるための社会的な対応
第４章　遊牧を維持するための技術と戦略
第５章　定住化にともなう新たな経済活動
第６章　生業と価値の多様化
第７章　遊牧と定住の両立を目指して

第１章では，東アフリカ遊牧諸社会における自然

条件への生業の適合性と，社会開発の導入と社会環境の動態をめぐる研究史にもとづき，「遊牧民研究の新たな視角」が記される。著者によると，1990年代以降，環境変動が資源生産と消費の非平衡を帰結する条件での遊牧においては，環境にあわせて個体数を調整し，資源を弾力的に利用することが合理的であるというニュー・エコロジーの見解が適用されている。この観点から，それ以前まで提唱されていた「環境収容力」の概念は妥当性を欠き，遊牧の非合理性は断定しえないという。

さらに，開発計画により遊牧の困難と貧困化のリスクが高まった1980年代以降，東アフリカ遊牧の民族誌で確認できる，農耕と遊牧との複合や市場経済と生業遊牧の併存に注目し，著者はそこに，政治・経済のグローバル化にあわせて，非自己完結的な遊牧生活を再編していく牧民の能動性を見いだす。そして，今日の遊牧を理解するために，生態と社会の多層的な相互作用に注目して，ローカルとグローバルな視点を融合するアプローチが提唱される。

第2章は，レンディーレ・ランドの自然・社会環境の不確実性と，町の発展および集落の定住化を記述する。レンディーレ・ランドは極度の乾燥と集中豪雨という気候の激変によって特徴づけられ，2001年から11年までの著者自身の調査期間に，回復途上にあった対象牛群が3度の干ばつに落命し，豪雨による鉄砲水に飲まれたという。また，1970年代以降には宗教団体や開発機関によって，賃金労働や商品取引，食糧援助の機会，そして町が創出されるとともに，町周辺への集落の定住化が促されたという。

第3章では，定住化と生活環境への社会的な対応が明らかにされる。人びとは頻繁に移動する放牧キャンプと移動性の低い集落にわかれて居住するが，近年，集落は町の近郊につくられ，人口や小屋サイズは拡大したという。ただ，同一クランの成員によるジェンダーと年齢にもとづく分散と協業も，ラクダ群を共同管理することでまとまる複数世帯間での，子の世話やミルクの消費の協調的な関係も維持されているという。

第4章では，先行研究との比較により現在の放牧管理が分析される。まず，多種類の家畜に応じて放牧地が選択されていることや，技術協力の接触によって近年，家畜の給水に使用する井戸掘りが活発化したこと，そして，それらの井戸が共同利用されていることが明らかにされる。調査地の現在のラクダの数は1976年より多く，世帯ごとの数も80年の大干ばつ直後より多いことから，レンディーレの遊牧管理は災害をのりこえて畜群を回復させる力をもつと著者は述べる。放牧群形成は現在，2群間で，母ラクダがいる群れとは他方の放牧群に幼獣を組み入れる方法がとられているが，1970年代は単独の幼獣群を形成したという。著者によれば，学校教育や牛放牧の普及がまねいた牧童不足が背景にある。ラクダキャンプの移動距離，そして泌乳量が増える雨季になると子どもがラクダキャンプに集住する点は，1970年代と変化はない。

世帯あたりの頭数が1993年から2003年で4倍となった牛の放牧は，小乾季には集落に留め，採食パッチと井戸を利用し，乾燥が深まると，河辺林に放牧し，井戸で給水する。雨季，季節河川や水たまりをもとめて，牛キャンプは頻繁に移動するという。水や牧草の要求度が高い牛ゆえに，長距離移動にむいているラクダよりも広域に，レンディーレ・ランドを遊動するという指摘は興味深い。

第5章は，生計維持のための経済活動を地域経済のなかに位置づける。1980年代以降，町の周辺に多くの集落がつくられ，小額での買い物が高頻度でおこなわれるようになると，主食用トウモロコシを購入対象として，家畜を売ったお金で返済する掛売りがはじまるなど，経済活動が活発になったという。さらに，牛は家畜市で需要が高く，多額の現金が必要なとき，人びとは成熟した牡牛を売却するという。賃金労働の主要な機会である出稼ぎには大半の人びとは消極的だが，現在では，青年および長老人口の10パーセント前後にあたる人びとが，ナイロビに出稼ぎにいっているという。

第6章の焦点は生業と価値の多様化である。長子相続制度をとるレンディーレ社会において，複数の青年や少年のいる世帯では，長男が大家畜の管理を担当し，次男以下は「雇われ牧童」となってその報酬として家畜を受け取り，あるいは学校教育をうけるという。また，家畜の売買経験者がいる世帯は，牛を増やすために労働力を割りあてる傾向が見いだされるという。

家畜の価値には明瞭な差異が確認される。幾世代にわたって人びとが強く依存してきたラクダが，複雑な文化価値をそなえているだけでなく，婚資や信

託の制度が適用され，複雑な権利の束となっているのに対して，関係史の短い牛は個人で所有され，処分は容易であるという。また，現在では，家畜市での売買機会の増大とともに家畜を含むモノの現金レートが普及しているが，それはしばしば，従来の物々交換レートとの差異をとどめたまま並存しており，著者は注意をうながしている。

第７章では，レンディーレの今日の生活実態をまとめ，遊牧の持続と発展にとっての重要な要素が抽出される。著者は，現代の集落を，同一所帯内の長老たちが援助食糧の配分や国の政策について情報を交換して意思を統一する重要な場となっているとし，町へのアクセスがよい集落は，キャンプと町の間での援助食糧や家畜の流通を媒介していると位置づける。さらに，集落の近くに新しくつくられた井戸は，家畜の集落への一時的な滞在を可能にし，集落とキャンプをつなぐ接点になっているという。また，人・モノ・情報のフローからみたとき，町は外部社会とレンディーレ社会を中継しているとみなせるという。最後に著者は，遊牧を発展的に持続させる諸要素として，①生態資源の精妙な利用，②資源利用の効率を高め，現金経済への対応を可能にする多種類の家畜飼養，③キャンプの高い移動性，④生業の技術と戦略を柔軟に駆使すること，とまとめる。

Ⅲ

本書が対象社会のリアリティを読者に納得させるうえで目を引く方法とは，まずなにより，著者自ら身をもって牧民とともに共在し，眼前でおこなわれている活動を克明に記録することによってはじめて作成できる資料（放牧距離，ラクダの給水パターンと飲み水量，複数の世帯間でのミルクの分配，井戸所有者と給水する家畜群の保有者との関係に関する図表など）が，惜しげもなく提示されていることである。

このことが物語っているように，まさに本書は，「事実」を示すためには，具体的事例をつみかさねる以外に方法はないという信念によってつらぬかれている。そして，この生態人類学の方法的信念によって，読者は，社会・自然環境の変動の渦中にありながら，絶えず新たに生命力を吹き込まれるレンディーレの遊牧が，その安定性を回復できる，しなやかに弾む力をたたえた生き方であると確信するだろう。

もちろん，賃金労働や農耕に重点を移すことによって，成立しえている他の遊牧社会もある。著者も書いているように，すべての乾燥地帯の遊牧民のシステムやその動態が一様であるわけではないことには，十分な注意を払う必要があるだろう。本書で書かれているように1980年代以降，東アフリカ遊牧社会では外部者たちの手によって，社会開発の企図が次々と展開されることになったが，そこで，外部社会の政策のあり方は，社会の多様性を顧慮することなく，「遊牧社会」を一般化，純粋化してとらえたうえで，それへの介入のあり方をデザインするやり方をとっていたが適切とはいえない。

冒頭でふれたように，東アフリカ遊牧民を対象とする研究者が問うてきた疑問のひとつは，伝統的な遊牧がまだ成長しうるのか，それとも，遊牧民のシステムは崩壊寸前の弱体化した脆弱なシステムであって，持続可能な遊牧民のシステムを回復することはもう実現不可能なので，根本的に異なる生業システムが必要とされているのかというものである。

この論争の悲観論的な立場の議論では，アフリカの角地域には今やあまりにも多くの遊牧民がいて，自然資源に生産性の向上がみられないことと相まって，持続できる遊牧システムを支える十分な家畜群は維持できないとされる。「遊牧の終焉」論者たちによると，「遊牧民の救済策」は，生業遊牧に依存する人びとの数を大きく削減することである。言い換えれば，新しい生業を創造し，可能な限り多くの人びとを，できる限り早急に遊牧経済から切り離すために，つまり，生業システムの根源的変容のために，あらゆる努力がつくされるべきであると考える。

このような新マルサス主義にもとづく「遊牧の終焉」論に対して，２つの反対意見が示されてきた。第1の反対意見は，アフリカ遊牧のボズラップ・モデルにもとづくオールタナティヴを提示するものだ。たとえば，カメルーン北部の地方都市近郊に居住する遊牧フルベは，村にとどめおかれた牛を飼養するために工業製品化された綿実ケーキをつかう一方，高い遊動性をもつ遊牧民に群れを信託し，集約的な遊牧戦略と粗放的な遊牧戦略を連接させてい

る。ここでは，飼料への依存という資本投下によって，家畜の生産性を高める集約化が成し遂げられていると解釈される。

第2の反対意見は，ほとんどの遊牧民が他の生業ソースを有していることに注目する。仮定された単一の生業を割り振り，社会分析を省略して算出された，家畜／人間の最小最適比率への焦点化は，誤ったものであるというものである。この点において，本書で著者が説明しているニュー・エコロジーの考え方は，この第2のものと連なっている。ニュー・エコロジーを牽引するデヴルーとスコーンズは，これからの政策は，伝統的な生業とこれらの生業が依存している資源を支え，維持しつつ，ローカルなマーケットの連携を強化することや，多様化をうながすことに，焦点をあわせるべきであると考えている［Scoones 1999; Devereux and Scoones 2008］。

「遊牧の終焉」をめぐる両陣営の対立は，たとえば灌漑農耕の導入をめぐる姿勢に端的にあらわれている。「終焉」論者は，灌漑農業を導入して遊牧民が定着農耕民として生計をたてることを推進し，デヴルーとスコーンズは，水辺の牧草地域を農業セクターに占有させてしまうことで，大規模な崩壊が生じるという理由から，強い警戒心を抱いている。

今後，レンディーレと外部社会との関係はどのようにあるべきだろう。結論にあたる第7章の最後のパラグラフで著者は，「遊牧民の将来について考えるときには（中略）牧民自身の選択と対応を重視すべきだとわたしは思う」と述べている。これは，一般化された遊牧民イメージにもとづいて介入戦略を決定するデヴルーとスコーンズとも，「遊牧の終焉」論者とも異なっているし，また，遊牧民の生活実態の多様性に応じて，社会の発展に対する外部支援の仕方が選択されるべきだという答え方でもない。それはむしろ，遊牧民とともに共同の現在を築き上げていくプロセスにおいて，遊牧民の「将来」に対する外部の関わり方が，いわばインターラクショナルに創発されていくことを重視する立場である［北村 1996］。この「開発」の構想は，身をもってなされる生態人類学の知の彫琢の仕方と通底しているようにも思われる。

最後に，北東ウガンダ乾燥サバンナの遊牧民カリモジョン社会で人類学調査に従事する評者にとって，本書がもつ意味を記そう。この地で，まつろわぬ民として他者化された牧民たちは，セキュリティ確保を謳った移動制限と，武装解除に名を借りた全世帯包囲捜索および強制連行を柱とする「統合的開発」の対象となってきた。これはレンディーレを含む多くの東アフリカとは異なり，開発が直接的暴力に帰結する事例だが，「現地の問題」に対して不十分な知識にもとづいて行動することをも徳が高いと価値づける，手放しの決断主義が作用している点は，共通している。正義の信念と知識，緊急性と知の二者択一を迫ってくる政治を，事態生起の文脈と個別具体的な人間の「顔」を重視する生身の主体としての立場から次々とつき崩していく，という人類学のスリリングな責務を，評者は本書を読んであらためて深く認識した。

文献リスト

＜日本語文献＞

伊谷純一郎 1982.『大旱魃――トゥルカナ日記――』 新潮社.

北村光二 1996.「身体的コミュニケーションにおける『共同の現在』の経験――トゥルカナの『交渉』的コミュニケーション――」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』（叢書　身体と文化　第2巻） 大修館書店.

＜英語文献＞

Devereux, Stephen, and Ian Scoones 2008. “The Crisis of Pastoralism?” Future Agricultures Consortium, Institute of Development Studies, University of Sussex.

Sato, Shun 1980. “Pastoral Movements and the Subsistence Unit of the Rendille of Northern Kenya: With Special Reference to Camel Ecology.” *Senri Ethnological Studies* 6: 1-78.

Scoones, I. 1999. “New Ecology and the Social Sciences: What Prospects for a Fruitful Engagement?” *Annual Review of Anthropology* 28: 479-507.

（長崎大学大学院国際健康開発研究科助教）